

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.15

私は新日本紀行を見ておるうちに旦那様に鬼の面の奉納を思いとどまらせるため、あまめはぎの神事を利用することを思いつきましたのじゃ。

就寝中の旦那様の枕元に鬼の装束をまとった私が立ち、決して儂の面を神棚などに奉納するではないぞと脅し、あきらめさせる計画じゃ。



あまめはぎのミノの代わりはナイロンテープを裂いて作った合羽を用意した

のじゃが、やはり包丁は危ないし暗闇では見えにくい。ここは明かりの役目にとマッチを束ねた松明を準備したのじゃ。

「へへへ、これでよしじゃ。」と笑う私の耳元に

「へへへ、何がよいのぢゃ？」という声が。

「ひっ」と小さく悲鳴を上げ声の主を見上げれば、援姫様のお顔が。



またも間の悪いことに幼稚園から姫様が帰って来たのじゃ。

「ぼすけ、にやにを笑うておる？しよれは鬼の面か？今日幼稚園でも豆まきをしたじよ。続きをしゆるか？それ、鬼は外っ、福は内い」というと煎り豆を投げて来られたのじゃ。

「な、何をなされます姫様、当たったら、危ないでしょ！」と逃げ惑う私をみ

て、

「当てておるのぢゃ。きゃーっ、ぼすけ逃げるにゃ。鬼は外！」と更に煎り豆

を。



「あいたたたっ！ひ、姫様、これは鬼ではありませんぜ。あまめはぎの神様で

すう・・・。」と叫べども豆を投げるのに夢中の姫様の耳には届きませぬ。幼

稚園から持ち帰った豆を全て撒き終わるとやっと、

「ぼすけ、豆がにゃいぞ。なんでぼすけの鬼は外へでていかんの？」とようや

く私の話を聞いてくださったのじゃ。

「あまめはぎ？鬼とはちがうのきゃ？」と聞かれる姫様に、

「実はすな、旦那様を驚かそうと・・・。」と計画をお話ししたところ、

「おもしろーい。援も見たい！今夜ぢゃな。」と姫様。

「夜の10時ですよ。それと姫様、旦那様がお怒りになられたら、助けて下さいましよ。」と

お頼みしたのです。それに姫様は

「わかっておる。援に任せておきえ。」とお答え下されたのですじゃ。



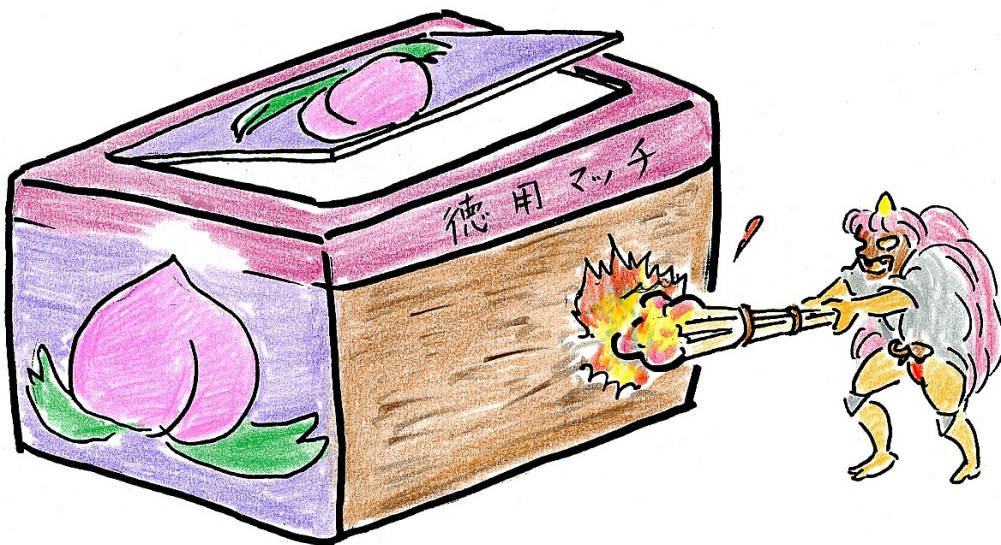
そして10時。

お屋敷の点検を終えて番小屋へ戻って来た旦那様はすでに深い夢の中。

時は頃合いを過ぎ……。『ぽっぽおー、ぽっぽおー』と番小屋の鳩時計が11時を告げるというのにいくら待っても姫様が参りませぬ。

「ええいぼすけの馬鹿者め、こんな夜分までわらしが起きておれる筈ないぢやろが！」

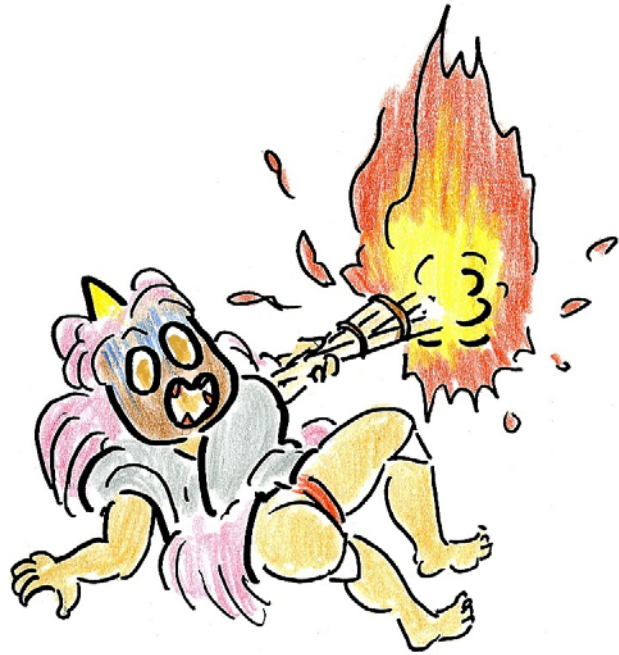
姫様のお言葉を信じたばかりに……。仕方ない、この上は我が一人で。」と旦那様の寢床へと向かい襖を開けると、松明代わりのマッチの束に火を点けましたのじゃ。



ポオオツと勢いよく燃えるマッチの松明。マッチ一本の時とは桁違いの明るさと熱量に、

「こ、これは駄目じゃ！」と消そうとして振り回せば却って火は大きくなり、マッチの軸が更に勢いよく燃え出したのじゃ。

「か、火事になるっ！」と表へ駆けだしたのですじゃ。



やっとのことで表へと出て見ると、マッチの軸はもう手元まで燃え、更には焼け細って今にも先の方が折れて、落ちてしまいそうになっておった。

「うあちちいっ」と悲鳴を上げ、お屋敷の中庭に投げ捨てたのじゃ。

「ふうう・・・助かった。」と大息をついたところへ

「ご助、こんな夜更けに何をしておる騒々しい。」と旦那様が起きてこられたのじゃ。

「み、見つからずにすんだわい。」と胸を撫でおろしたのじゃが、悪いことは

出来ぬもの。因果応報、悪事は必ず露見する、のたとえじゃな。投げた時にマ
ツチの頭の一つがミノの上に落ちていたのじゃ。



そしてナイロン製のミノはアツと言う間に私の背でまるで燃える髪のように立
ち上がったのじゃ。

「旦那様あ助けて下せい」と助けを求める言葉は、鬼の面で遮られ旦那様には
「うおおおおおおおおおっ」との叫び声にしか聞こえません。



さながら不動明王様が迫ってくる様に、

「ひいいっ、お助けをっ」とひれ伏す旦那様。

「うわちちちいっ」と更に駆け寄りますと、私の叫び声が旦那様には

「許さんっ」と聞こえたようで、

「も、申し訳ござりません。神様と同列に己が面を飾れなどと不遜な考えを。

どうかお許し下さいい」と一層ひれ伏したのですじゃ。

背で燃えていたナイロンテープ製のミノはアッと言う間に燃え尽きたのですが、幸いなことに私の中間の装束は防炎性でしたから、火傷せずに済んだのですじゃ……。

翌朝のこと。旦那様が、

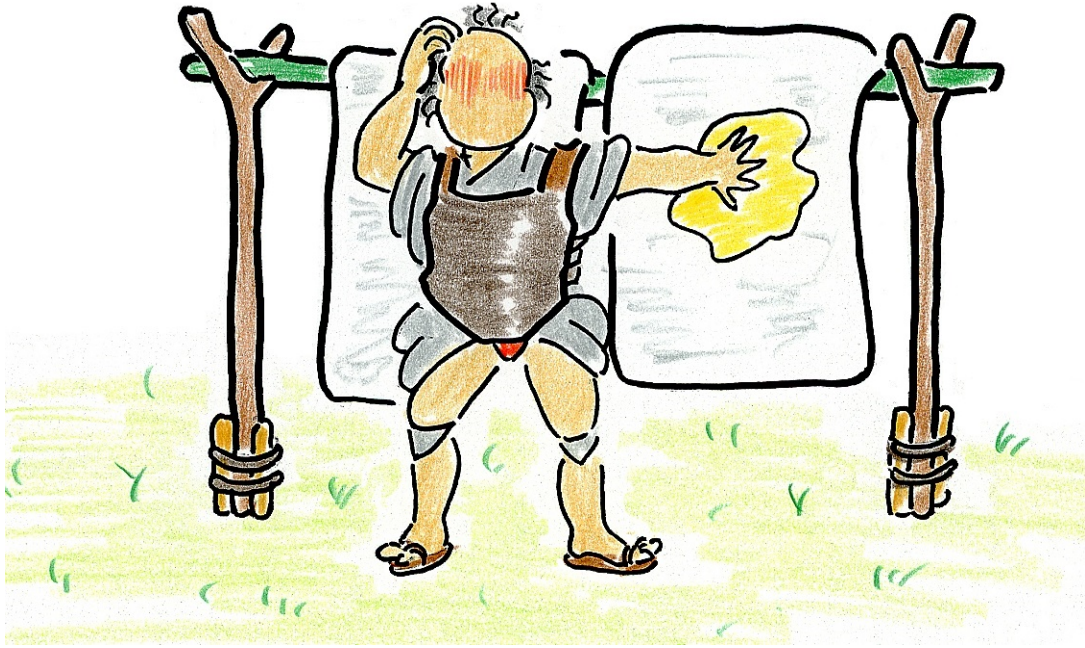
「ご助、いかがしたのじゃ。その髪は？」と聞かれますように、大切なちょんまげが燃えてしまい、あたかも落ち武者のように。

「はははっご助、そちの髪も不動明王様のバチじゃ。拙者も昨晚きつく叱られての。もう鬼の面など金輪際作ってはならんぞ。」と上機嫌で話されてから、

「うん？如何したのじゃ布団など干して……ややお主！」

「み、見ないでください。」必死に背中で布団を隠したのですが

「あははは。ご助、おねしょか？ひひひ。これはお殿様にも良い土産話が出来たわい。ソチの年でのおねしょはギネスものじゃな。また火遊びでもしたのじゃろ。」と続ける旦那様に、



「ち、違いますだよ。」と言いながらも夢に出てきた不動明王様から、

「火遊びを続けるなら今夜もおねしよの刑じゃ。」と言われたことを思い出し、

震えておりましたのじゃ。

うううっ、くわばらくわばら。この鬼の面で大変な目にあったが、もとはと言えは深酒をしてお雑煮を焦がした私の失敗から始まったことじゃから反省、

反省・・・と、番小屋へ戻りながらお屋敷の方を見ると、

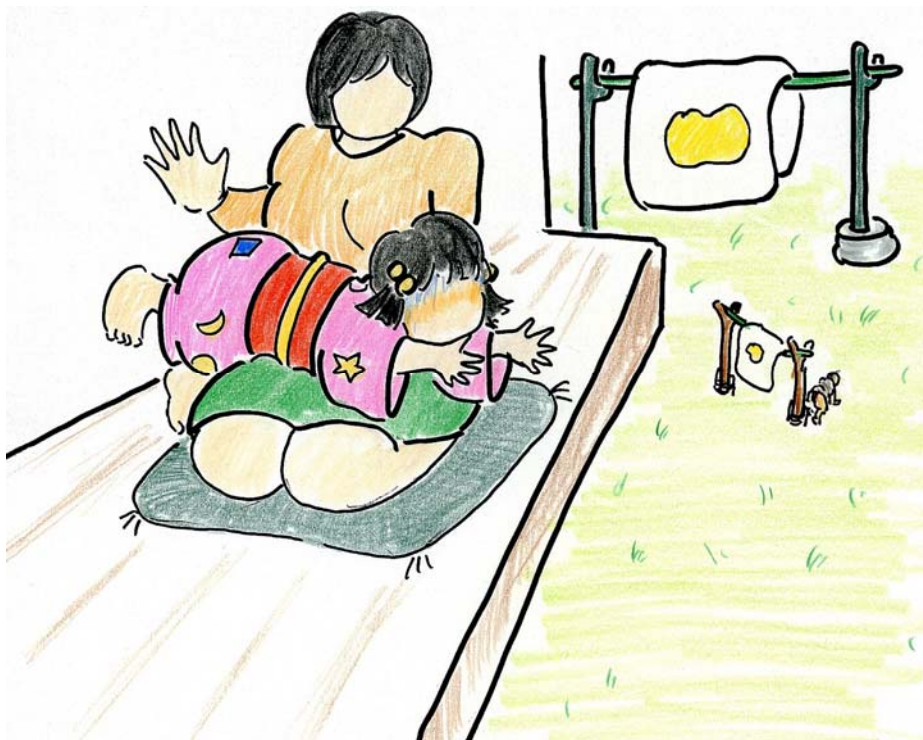
「援、おねしよしたの？」

「ママー違うによ。これはぼすけがしたによ。」と姫様。

「ぼすけなんていないでしょ。おねしよは仕方ないけど人のせいにする子はいけない子よ。来なさい。」と 奥方様にお尻ペンペンされておる姫様を見かけたのじゃ。

そして

「イヤー。助けてぼすけえー、痛いよおちえーん」と姫様の悲鳴が続いたのですじゃ。



姫様も旦那様を驚かそうとマッチの松明計画を喜んでおったからバチが当たったのじゃなあ。

よいですか、いい子のみんなは絶対に火遊びなんかしちゃいけないよ。

こわーいバチが当たるからね。